

第 62 話＜牛の解剖＞の要約と参考資料

第 62 話＜牛の解剖＞の要約

1924 年 4 月に土呂久で死んだ牛の解剖書が残っていました。執刀したのは、当時 20 歳の鈴木日恵獣医。食べ物と空気から体内に入った有害物質が、消化器と呼吸器を同時に侵していたのです。原因物質を特定するには、牛の臓物から毒物を検出することが必要でした。

第 62 話＜牛の解剖＞の参考資料

6 2 - 1 鈴木日恵さんの経歴

川原一之「斃牛」（「怨民の復権」Ⅱ P58~59 より）

鈴木獣医は明治 37 年生まれで 20 歳、畜産に賭ける情熱は人一倍強かった。高鍋農学校で獣医の資格をとり、卒業後は獣医師として陸軍で学んだ。除隊し故郷に戻ってから、郡畜産組合の技手を勤めている。

高千穂町史より

大正 13 年当時の技術員、峯村芳弥辞任により、後任技手として鈴木日恵を採用した。

6 2 - 2 鈴木日恵獣医による斃牛解剖書

死体解剖書

一. 畜主 西臼杵郡岩戸村大字岩戸字土呂久三三九一

佐藤一蔵

牝牛 黒毛 西臼杵郡岩戸村産 大正十三年二月十日生

発病年月日 大正十三年十一月十三日

斃死年月日 大正十四年四月六日午後一時五分

剖検年月日 大正十四年四月七日

二. 病歴ノ大要

本牛ハ、発病以来營養漸次ニ衰へ、皮毛光沢ヲ失シ、点々脱毛ス。病初下痢アリ。長ク継続スルコト無キモ、数回ニ涉リテ反復ス。又、少々白色ノ粘液ヲ鼻腔、口腔ヨリ漏スト同時ニ頻々咳嗽アリ。其ノ后、食欲漸次ニ、斃死前十日頃ニ至リ著シク減退シ、一日穀物約二、三合（煮タルモノ）ヲ食スルニ過ギズシテ、寝タル俛起立セズ、營養衰退從ヒテ著シク、遂ニ斃死ス。

又、斃死前約一ヶ月迄約二ヶ月間、咽頭部及顎凹淋巴腺甚ダシク膨張セルコトアリ。

三. 外部検査

鼻腔ヨリ透明帯白色ノ粘液ヲ漏シ、眼球ハ著シク陥没シ、結膜ハ殆ンド白色ヲ呈ス。皮毛光沢ヲ失シ、營養甚ダシク不良ナリ。腹囲膨大、肛門ヨリハ汚埃不潔粘液様物ヲ漏シ、周囲ニ乾着ス。皮膚ハ、肩部肋部等ニ於テ点々禿毛シ、牽ク時ハ容易ニ抜ク事ヲ得。死強完全ナリ。右側臥ニテ斃死ス。

病理解剖的診断

- 一. 甚ダシキ營養不良
- 二. 顎凹、咽背、淋巴腺ノ腫脹及蓄膿
- 三. 肺気泡及小気管枝内ノ滲出物ニヨル充填、並ニ組織増殖、或ハ萎縮気管枝淋巴腺ノ腫脹及蓄膿
- 四. 第一胃第二胃第三胃壁ノ剥離変色、内容物多量、並ニ第三胃食物箝留
- 五. 腔腸壁ノ斑点、結腸内ノ滲出液
- 六. 心臓筋質ノ変色脆弱、両心房室及動静脈血管ノ血液凝塊充滿、各組織（肺臓ヲ除ク）ノ貧血
- 七. 肝臓、腎臓実質ノ脆弱変色

病理解剖的所見

本牛ハ、呼吸器消化器系統共ニ長期ニ渉リ犯サレ居タルモノニシテ、前胃機能衰弱ノ為ニ反芻作用等停止シ、内容物多量蓄積シ、第三胃ノ如キハ、葉間ニ多量ノ乾燥内容ヲ有シ、中央部ニ依リ僅カニ食物ヲ通シ、大小腸壁ニハ藍色点ヲ造リ、粘膜剥離ス、為ニ内容物腐敗発酵シ、有害物ヲ生ズ。

肺ニ於テハ、有害物質或ハ作用ノ為ニ滲出ヲ生ジ、或ハ間質増殖等、其ノ作用ヲ侵害スル外、有害作用物質ヲ生ズ。

而シテ、機能衰退及滲出腐敗ヨリ生ジタル前呼吸器及消化器ノ有害物質ハ、呼吸器及消化器ヲ犯スベキ有害物（有害作用ノ時ハ前者ノミ）ト共ニ血液内ニ吸収セラレ、各組織ノ作用ヲ侵害シ、益々疾病ノ程度ヲ増シ、又、肝、腎、心臓等ノ実質ヲ変化セシメ、神経系統ヲ犯シ、心臓大血管等ノ収縮弾力性ヲ減ジ、為ニ血液循環ハ障害セラレ、肺ノ作用ノ減退ト共ニ、遂ニ死ニ至ラシメシモノナルベシ。

呼吸器消化器ヲ犯スベキ原因物質ハ、死強ノ完全及其他ノ臓器変状等ヨリ察スル時ハ、呼吸器或ハ消化器ヲ単独ニ犯スベキモノニ非ズシテ、全身的ニ罹病シ、一臓器罹病シ、次デ他臓器ノ疾病継發セルモノ等信ズルヲ得ズ。又、伝染病ノ疑ヲ有セズ。現在罹病牛ノ症候及周囲草木其他動物等ノ事情ヨリ推察スル時ハ、連続セル有害物ノ中毒ニアラザルヤノ疑ヲ深カラシムルモノナリ。

（* 句読点は川原）

6 2 - 3 鈴木日恵さんの話（1975 年ごろ聴取）

解剖した結果、死んだ牛は原因物質を呼吸器と消化器の両方から吸収し、全身をおかされていたことがわかった。あまり見られない中毒だし、土呂久の牛が一樣に同じ症状にかかっていることから、原因は鉍毒（亜ヒ酸と亜硫酸ガス）だと思ったが、それを証明するには死んだ牛の材料を鑑定してみる必要があった。県の衛生課に送ったが、鑑定の結果については何も聞いていない。それからしばらくして、鉍山は精錬窯の煙道を 30 メートルくらい伸ばして、高い所から煙が出るように改良したが、たいした効果はなかったようである。